

保育図書に示された3歳未満児の遊びと 保育に関する考察

A study on form of playing under 3years old shown
in the books for nursery teachers

西村 真実*

Mami Nishimura

保育者を対象とする図書に示された遊びの主導権と形態を明らかにするため、3歳未満児の遊びをテーマにした保育図書9冊に掲載されている遊びの分析を行った。分析対象となった遊びの数は0歳302、1歳384、2歳331である。どの年齢においても遊びの主導権が保育者にあり集団を志向する遊びが多く、遊びの主導権が子どもにある個人遊びは少ないという結果を得た。主導権が保育者にある遊び、集団志向の割合は年齢が上がるとともに上昇し、大人と子どもが1対1で行う遊びは、0歳が最大で、年齢の上昇とともに割合が減少した。保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育保育要領に基づいた子どもの発達に適した遊びの提供とは言い難く、保育の現状の一端が窺えた。

はじめに

子どもにとって遊びは大きな意義を持つ活動である。保育に携わる者であれば誰もがその価値を理解している。保育実践に子どもの遊びの援助は不可欠である。特に3歳未満児の場合、年齢別で構成されているクラスでも、クラス内の子どもの発達のばらつきは大きく、発達に応じた遊びの豊かな展開は保育者の資質が問われるものといえる。保育者の悩みに応えるように、遊びをテーマとした保育図書は数多く出版されている。今日、保育者を対象として出版されている図書を見ると、そこには様々な遊びが掲載されている。保育者が参考にする図書での遊びの扱われ方は、保育実践とその質に少なからず影響を及ぼすものとなる。そこで、遊びを主題として取り上げる保育図書を収集し、その中で示される遊びの内容を分析することから知見を得たいと考えた。それは、保育の質の向上への有益な示唆になると推測されるからである。

1. 研究の目的

本研究の目的は、保育者を対象とする図書に示された遊びの主導権と形態に着目し、保育図書における遊びの主導権と形態の示し方の傾向を明らかにすることにある。

* こども学科 准教授

2. 研究の方法

保育者を対象に市販されている保育図書のうち、より確実に保育者に利用されているものを抽出するため、版を重ねているもの、複数の大型書店ホームページに在庫の確認ができたもので購入可能なものを9冊入手した。なお、入手した図書には、0歳、1歳、2歳でシリーズになっているものが2組あった。各図書で紹介されている遊びを、次の3点に着目し、類別した。1つめが対象となる子どもの年齢である。次に、紹介されている遊びの主導権が大人にあるか子どもにあるかを類別し、大人が主導するものを「大人主導」、子どもが主導するものを「子ども主導」とした。3つめが遊びの形態で、掲載されている遊びが集団を志向するものとして示されているか、もしくは子ども個人による一人遊びかで、「集団志向」と「個人遊び」に類別した。なお、大人と子どもが1対1で行う遊びは、これらの主導権や形態に属さないものとして「大人子ども1:1」というカテゴリーを設定した。

その結果、「大人主導で集団志向」「大人主導で個人遊び」「子ども主導で集団志向」「子ども主導で個人遊び」「大人子ども1:1」という5つのカテゴリーが設定された。また、掲載された遊びに明記された対象年齢が、2つの年齢を対象としている場合は、どちらの年齢でも分析対象とした。図書に示された遊びの総数と分析対象数が異なるのは、この重複のためである。9冊の概要は表1のとおりである。分析対象数は表2に示す。

表1 図書の概要

	対象年齢	度数
A	0-2	76
B-0	0	53
B-1	1	80
B-2	2	73
C-0	0	114
C-1	1	121
C-2	2	120
D	0-2	132
E	0-2	78
合計		847

表2 分析対象数

対象年齢	度数
0歳児	302
1歳児	384
2歳児	331
合計	1017

3. 結果

結果は以下のとおりである。

(1) 0歳児の遊び

大人と子どもが1対1で行う遊びが0歳児を対象とする遊び全体の33.4%を占めた。その次は大人が主導する集団遊びで22.5%であった。3番目は子どもが主導する一人遊びが16.6%、そして大人が主導する子どもの一人遊び15.2%が続いた。最も少ないものは子どもが主導する集団遊びで、これは全体のうちの12.3%であった。

主導者別に出現の様態を見ると、大人が主導する遊びが最も多く、割合は37.7%であった。次が大人と子どもが1:1で行う遊びで33.4%、子どもが主導する遊びは28.9%であった。(表3) 形態別に出現の様態を見ると、集団を志向する遊びは34.8%、一人遊びは31.8%であった。(表4)

表3 主導権でみる0歳児の遊び

主導者	形態	度数		%
大人主導	集団志向	114	68	22.5
	個人遊び		46	15.2
子ども主導	集団志向	87	37	12.3
	個人遊び		50	16.6
大人こども1:1			101	33.4
計			302	100.0

表4 形態で見る0歳児の遊び

形態	主導者	度数		%
集団志向	大人主導	105	68	22.5
	子ども主導		37	12.3
個人遊び	大人主導	96	46	15.2
	子ども主導		50	16.6
大人こども1:1			101	33.4
計			302	100.0

(2) 1歳児の遊び

大人が主導する集団での遊びが38.8%と最も多かった。次は子どもが主導する一人遊びで17.7%、その次は子どもが主導する集団遊びで15.9%、そして大人が主導する子どもの一人遊び15.1%が続いた。ただし、子ども主導の一人遊び、子ども主導の集団遊び、そして大人主導の子どもの一人遊びの3項目は、数値上の差は僅差であった。最も少なかったのが、大人と子どもが1対1で行う遊びで12.5%であった。

これらを遊びの主導者で見ると、大人主導のものが53.9%と半数以上を占め、子どもが主導するものは33.6%であった。(表5)

さらにこれらを形態ごとに見てみると、集団を志向する遊びが54.7%と半数を超え、子どもが一人で遊ぶ形態は32.8%であった。(表6)

表5 主導権で見ると1歳児の遊び

主導者	形態	度数		%
大人主導	集団志向	207	149	38.8
	個人遊び		58	15.1
子ども主導	集団志向	129	61	15.9
	個人遊び		68	17.7
大人こども1:1			48	12.5
計			384	100.0

表6 形態で見ると1歳児の遊び

形態	主導者	度数		%
集団志向	大人主導	210	149	38.8
	子ども主導		61	15.9
個人遊び	大人主導	126	58	15.1
	子ども主導		68	17.7
大人こども1:1			48	12.5
計			384	100.0

(3) 2歳児の遊び

大人が主導する集団遊びが48.3%とほぼ半数を占めた。次は大人が主導する一人遊びで19.6%、そして子どもが主導する一人遊びが13.3%と続いた。子どもが主導する集団遊びは10.9%で、最も少なかったのが大人と子どもが1対1で行う遊び7.9%である。

これらを遊びの主導者で見ると、大人主導の遊びが67.9%とほぼ7割を占めた。子どもが主導する遊びは24.2%であった。(表7)

さらに遊びの形態で見ると、集団遊びが59.2%とほぼ6割を占め、一人遊びは32.9%であった。(表8)

表7 主導権で見ると2歳児の遊び

主導者	形態	度数		%
大人主導	集団志向	225	160	48.3
	個人遊び		65	19.6
子ども主導	集団志向	80	36	10.9
	個人遊び		44	13.3
大人こども1:1			26	7.9
計			331	100.0

表8 形態で見ると2歳児の遊び

形態	主導者	度数		%
集団志向	大人主導	196	160	48.3
	子ども主導		36	10.9
個人遊び	大人主導	109	65	19.6
	子ども主導		44	13.3
大人こども1:1			26	7.9
計			331	100.0

(4) 遊びの主導権と年齢

遊びの主導権の年齢による推移を見てみると、大人が主導する遊びは0歳で37.7%、1歳で53.9%、2歳では67.9%であり、年齢が上がるとともに増大していた。子どもが主導する遊びは、0歳で28.9%、1歳で33.6%、2歳では24.2%であった。詳細を見ると、大人主導では集団志向が0歳22.5%、1歳38.8%、2歳48.3%と急増する傾向にあった。その一方で、大人主導の個人遊びは0歳15.2%、1歳15.1%、2歳19.6%と、1歳から2歳で微増する程度であった。(表9)

子どもが主導する遊びでは、0歳28.9%、1歳33.6%、2歳24.2%と0歳から1歳で微増するが1歳から2歳で減少した。詳細を見ると、子ども主導で集団志向の遊びは、0歳12.3%、1歳15.9%、2歳10.9%であった。0歳から1歳で微増するが、1歳から2歳で減少した。子ども主導の個人遊びを見ると、0歳16.6%、1歳17.7%、2歳13.3%であった。0歳と1歳の間にさしたる差は認められないが、1歳から2歳で明らかに減少した。

大人と子どもが1対1で行う遊びを見ると、0歳33.4%、1歳12.5%、2歳7.9%と年齢が上がるにしたがって減少した。(表9)

表9 遊びの主導権と年齢

主導者	形態	0歳	1歳	2歳
大人主導	集団志向	22.5	38.8	48.3
	個人遊び	15.2	15.1	19.6
子ども主導	集団志向	12.3	15.9	10.9
	個人遊び	16.6	17.7	13.3
大人こども1：1		33.4	12.5	7.9
計		100.0	100.0	100.0

(5) 遊びの形態と年齢

遊びの形態の年齢による推移を見ると、集団を志向するものは0歳で34.8%、1歳で54.7%、2歳では59.2%であった。0歳から1歳で大きく増加し、1歳から2歳で微増する傾向にあった。詳細を見ると、大人主導のものが0歳22.5%、1歳38.8%、2歳48.3%であった。0歳から1歳、1歳から2歳ともに増加傾向にあった。子ども主導のものをみると0歳12.3%、1歳15.9%、2歳10.9%であった。0歳から1歳では微増するものの、1歳から2歳で減少し、2歳の割合は0歳よりも低かった。

個人遊びを見ると、0歳では31.8%、1歳で32.8%、2歳では32.9%であった。どの年齢においても3割弱であった。詳細を見ると、大人主導のものが0歳15.2%、1歳15.1%、2歳19.6%であった。0歳と1歳の間にはさしたる差は現れないが、1歳から2歳で増加する。子ども主導のものをみると、0歳16.6%、1歳17.7%、2歳13.3%であった。0歳と1歳は差があるとも言い難いもので、1歳から2歳では減少した。(表10)

表10 遊びの形態と年齢

形態	主導者	0歳	1歳	2歳
集団志向	大人主導	22.5	38.8	48.3
	子ども主導	12.3	15.9	10.9
個人遊び	大人主導	15.2	15.1	19.6
	子ども主導	16.6	17.7	13.3
大人こども1：1		33.4	12.5	7.9
計		100.0	100.0	100.0

4. 考察

大人主導で集団を志向する遊びが0歳を除いて最も多く、これは年齢が上がるにしたがって増加する傾向にある。同じ集団を志向する遊びでも子どもが主導権を持つもので最も多いのが1歳児で2歳になると1割程度となる。保育図書で示されている遊びは、集団での活動がどの年

齢においても最も多く、主導権を大人が持つ遊びが多く紹介されている。そもそも3歳未満児で大人主導の集団活動を想定していることに大きな無理がある。保育所保育指針では、第3章保育の内容2保育の実施上の配慮事項に0歳児に対しては(2)乳児保育に関わる配慮事項として、特定の保育士が応答的にかかわる旨が明記されており、集団での活動が想定されていると読み取することは困難である。また、(3)3歳未満児の保育に関わる配慮事項には、探索活動が十分に行えるよう環境を整えること(ウ)子どもの自我の育ちを見守り、保育士等が仲立ちとなってかわり方を丁寧に伝える旨が示されている。探索活動は個人の活動であり、自己主張の強まる1歳から3歳前の時期に少人数でも子ども同士の関わりに大人の介在が必要であるということが明記されている。少なくとも、保育所保育指針には3歳未満児に集団活動を求める記述は無い。そもそも0歳から2歳の子どもを対象として保育士が主導する集団活動が適切な保育方法といえる根拠もない。

1965年のソビエトにおいても、生後2年から行われる小グループでの課業では、少人数で行われることが大前提とされていた。さらに、大人主導の教授的遊びを全グループ一斉に行うべきではないとも明記されている¹⁾。同時期の月間保育雑誌に掲載された2歳児の保育記録を見ると、保育者はクラスの子どもみんなが興味を持つような経験を用意し、みんなが参加できる場をあたえることに力を注ぎ、一人ひとりの子どもに課せられた課題は、集団活動に入ることであることが示されている。1965年に公布された保育所保育指針には、第1章総則2保育内容の基本方針3保育の基本方針に〈集団活動〉として(6)に、「子どもの年齢が低いほど、個別的な扱いをするよう配慮すること」と示されている。さらに、第4章1歳3か月から2歳までの幼児の保育内容では、冒頭の1発達上の主な特徴に、「他の子どもと協同して行動することはまだ困難である。」と、はっきり示されている。2歳児の保育内容を見ると、発達上の主な特徴として「同じ年齢の子どもに対して関心があり、いっしょにいることを好むが、協調して遊ぶことができず、自分の思う通りに遊ぶことが多い。」と示されており、子ども相互の間にトラブルが生じやすいことと「保母とのふれあいを求め、それが満たされていると安定した行動をとる。」ことが明記されている。保育のねらいの1つに「(4)保母が仲立ちとなって、生活や遊びのなかで言葉のやり取りを楽しむようにさせる。」と挙げられている。

保育所保育指針が、個の活動をより重視する内容を示す一方で、現実の保育では「みんなで一緒に」という集団活動を重視する、ここに保育所保育指針と現実の保育実践に乖離があることが見て取れる。その乖離は、保育図書に示された遊びの集団志向の高い割合と現行の保育所保育指針においても、同様といえないか。

小林はカイヨワの遊びの定義を解説する中で、遊びとは、他者から強制されるものではなく、自分自身が自発的に行うものであること、遊びとはその活動自体が目的であることを指摘する²⁾。3歳未満の子どもにとっても、遊びは子ども自身の興味関心から始まる自発的な活動であり、子ども自身の持つ遊びの目的は「遊ぶこと」そのものである。集団活動では、個別の興味関心を集団活動の目的に従属させることが求められる。3歳未満児にそれを求めることは時期尚早であり、集団活動は子どもにとっての目的である遊びというよりも、単なる活動になってしまうことが危惧される。

保育者が参考にする保育図書には、3歳未満児一人ひとりがそれぞれの興味関心に応じて遊びに取り組む場面や子どもが遊びに取り組む姿そのものと、それを肯定するモデル保育者の提示が求められる。「みんなで一緒に」という呪縛から保育者を開放に導く可能性を有するものも保育図書だと考える。

子どもが個人で行う遊びは、どの年齢においても3割弱程度であった。年齢が上がるにつれ、大人主導のものは増加するが、子ども主導のものは減少する。年齢が上がるにつれ、遊びの主導権は子どもにわたるべきところ、逆の現象が生じている点が非常に興味深い。

0歳児であっても、子どもが抱いた興味関心によって探索を始め、物体に働きかけ、子どもは自分の力で遊び始める。それはまさに一人遊びである。小林は2歳から4歳にかけて一人遊びから平行遊び、そして連合遊び・協働遊びへ変容する遊びの発生機序を示した³⁾。平行遊びは、子どもが友達の傍で同じような活動をしているが互いの交流がない状態である。次に友だちと一緒に遊んでいるが、各自のイメージの世界で遊んでおり、明確なルールや役割分担がない状態である連合遊び、さらに集団を通じて明確な遊びのテーマや役割分担のある協働遊びへと展開するのが遊びの発達過程である。連合遊びが発生する契機には、子どもが他の子どもと協調することが必要であり、2歳頃の模倣や相手の行動を補足する行動の芽生えがそれに該当すると述べる。したがって、2歳は並行遊びから連合遊びへと発展する時期であると言い得る。大人と離れて一人で遊べるようになるのも2歳前後である。2歳中盤以降は、大人と一緒に2-3人で遊ぶことが可能になる。したがって、2歳遊びの援助は、一人遊びの保障から他児興味を示す際の介在が重要である。0歳から1歳での一人遊びはその全段階としても重要な意味を持つものである。これらの援助とは大人の主導によって成立するものではない。

保育者が参考にする保育図書では、その重要性を踏まえて一人遊びを保障するモデル保育者やそのスキル、連合遊びへの移行期の援助モデルの提示が求められる。保育者にとって保育図書はアイデアの宝庫ともいえるものである。そのため、保育図書が担う役割は大きい。

大人と子どもが1対1で行う遊びは、0歳で紙面の3割を占める。特定の保育者との関係性が重視される年齢であることを考慮すると、3割は決して多いとは言えない。しかし、年齢が上がるにつれて、その割合は減少し、2歳では1割を切るという結果であった。現行の保育所保育指針解説書においては、3歳未満児には柔軟なかたちでの担当制の中で、特定の保育士等が子どもとのゆったりとした関わりを持ち情緒的な絆を深められるように保育計画を立てることが推奨されている。また、大人から離れて遊ぶことができるようになるのが2歳前後であるが、大人から離れるためには、愛着基地への安心や信頼が不可欠である。したがって、大人と子どもが1対1で行う遊びが2歳児に不要であるとは言えない。むしろ、自我の拡大期にある2歳児が、他児と関与する際に生じる軋轢から生じる葛藤を抱くことを考慮すると、大人と1対1で行う遊びもまた子どもにとっては重要な遊びであろう。

保育図書では、3歳未満児のどの年齢においても大人と子どもで行う1対1の遊びをおしなべて提示することが重要である。3歳未満児という括りでは、2歳が最も高い年齢となる。しかし2歳児は3歳以上児のような連合遊びや協働遊びを楽しむわけではない。むしろ、3歳に向かって内面的かつ社会的に変容する過渡期にあるのが2歳である。そうした特性を踏まえ、大人と2歳児が行う1対1の遊びのモデルを保育図書が示すことには大きな意義がある。

5. 本研究の限界

本研究は、9冊の図書に示された遊びを分析したもので、数多く出版されているすべての保育図書を分析したわけではない。したがって、ここで検討した内容を一般化することは現在のところ困難である。今後は分析対象図書を増加し、さらに統計学的な分析を加えながら検討を進めたいと考えている。

まとめ

本稿では、保育図書に示された3歳未満児の保育の形態や遊びの主権のありようを検討した。遊びの形態の検討を通して、保育所保育指針の示す内容と保育図書に示された遊びの乖離について指摘したが、これは保育所保育指針の示す「遊び観」と保育図書の示す「遊び観」の乖離ではないかと考えた。両者の「遊び観」を統一することが重要な課題である。両者が共通の「遊び観」を持つことで、誌面に示されるモデルは集団遊びか個人遊びかという形骸的なものではなく、子どもが自発的に行う遊びのための条件整備、すなわち環境構成に焦点化されると推測する。

分析対象となった保育図書では、おしなべて大人主導の集団志向が高く、子どもが主導権を持つような遊びの紹介が少ないという結果を得た。これらは今日の保育の実態をいくらかでも反映したものと捉えると、保育図書のみならず、それを利用する保育者および関係者が持つ課題も大きい。

本稿では、版を重ねて市販された保育図書の分析を行った。ここでの指摘と考察は、保育図書出版社の責を問うものではない。出版社が図書を出版・販売し、販売部数を伸ばすには購買者のニーズに適合している必要がある。「どのような遊びを掲載すれば販売部数が伸びるか」は「保育者がどのような遊びモデルを求めているか」という購買者側のニーズにも影響される。そもそもニーズのないものは出版されない。保育者が求めるアイデアや遊びモデルの質が問われている。

最後に、分析対象となった図書では、1ページに1点または2点の遊びが全てイラストで示されていた。文章量は決して多いとはいえ、イラストが文章を補足するというより、文章がイラストの補足となってしまっている。その文章は、多少の配慮事項の記述や発達のポイントを付記しているものが散見されるものの、遊びの「ねらい」の例など皆無に等しく、ほとんどが遊び方の説明に終始しており、イラストブックの様相を呈している。ある保育図書出版社編集者によると「文章が多いものは読者が忌避する」「カラフルなイラストや画像が好まれる」ため、出版社は読者の嗜好に沿うものを出版する。少なくとも用語と教育に携わる専門性の高い職種を標榜する保育者が文章を忌避する、カラフルなイラストを多用した図書を好むとは、嘆かわしい現状である。しかし、それは同時に保育者養成に携にも重い課題を提示する。活字離れといわれる若年層は保育者養成課程に在籍する世代であり、その多くは数年後に保育者となる。活字離れへの対処は、保育者養成課程の抱えざるを得ない課題とも言い得るものであり、正に諸刃の剣である。遊び観の共有にも、それは言い得るかもしれない。保育者の抱く遊び観が、保育図書の示すものに近いものである可能性も否定できない。それには、保育者の遊び観をはじめとする知識の再確認や新たな知見を得るためのリカレント教育の普及が必要となる。保育現場と保育者養成課程の協同によって、保育の質が向上することに期待したい。

引用文献

- 1) クプチャーノワ著山本斌・森下はるみ訳：集団乳児保育の実際 3 歳までの遊びと課業、新読書社、PP.10, 1976 年
- 2) 小林真:第 9 章遊戯行動（遊び）の発達、堀野緑、宮下一博、浜口佳和（編著）、子どものパーソナリティと社会性の発達、北大路書房、PP.130, 2000 年
- 3) 小林真:第 9 章遊戯行動（遊び）の発達、堀野緑、宮下一博、浜口佳和（編著）、子どものパーソナリティと社会性の発達、北大路書房、PP.134, 2000 年